

第三十戦闘飛行集団地下司令部壕と戦後接收の熊本（健軍）飛行場

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷和生

1 昭和二十年の熊本と第三十戦闘集団

太平洋戦争期の熊本県内の正規飛行場は、陸軍7箇所（宮地、菊池、熊本、黒石原、玉名、隈庄、八代）、海軍2箇所（人吉、天草）、陸軍特攻用秘匿飛行場5箇所（山鹿：赤穂原、植木：合志木原野、大津：古閑原、熊本北：高遊原、人吉：神殿原・陸軍人吉）の計14箇所である。

本県に配備された「第三十戦闘飛行集団」とは、来たるべき本土決戦に向け、関東で編成された三好康之少将隷下の特攻機により編成された飛行集団である。部隊は「第十六飛行団（下館）とし、第五十一戦隊（四式戦・下館）、第五十二戦隊（四式戦・成増）、第五十九戦隊（四式戦・芦屋①）、第二四四戦隊（五式戦・八日市）、第六十二戦隊（四式重・西筑紫）」の編成となる。また、多数の中等練習機等を中心とした部隊は「第七飛行団（特攻18隊基幹・万世）、第二十一飛行団（特攻34隊基幹・都城）」から成る。

昭和20年7月に策定された「第六航空軍決号作戦大綱」によれば、本県一般飛行部隊は**第十六飛行団（16F C）**に属し「51F、52F、59F、244F、62F」の配備を行っている。特攻機は「一式戦×4隊、四式戦×4隊、偵察機×2隊、襲撃機×10隊」の部隊配備で、その配当飛行場は「熊本、隈庄、菊池、黒石原、玉名、山鹿、植木、熊本北、大津」の9飛行場とされる。防衛庁戦史資料室内資料「陸作命甲第二号 別紙資料 飛行場配置要図」の飛行場名では、「**30F C（第三十戦闘飛行集団）**」として熊本県内では「隈庄、人吉」と、鹿児島県内「知覧、萬世、上別府」、宮崎県内「都城西、都城東、木脇、唐瀬原、新田原」の南九州グループと一体化した事情が見て取れる。

これまでの調査で玉名飛行場（第九十・九十一振武隊の二隊）、黒石原飛行場（第九十四振武隊）、陸軍人吉秘匿飛行場（第八十九振武隊）の九三式中間練習機特攻機の部隊配備が確認されている。



①福岡県芦屋基地での敗戦後の四式戦闘機

2 熊本での第三十戦闘集団と地下司令部壕

第六航空軍の指揮下に入った**第三十戦闘飛行集団司令部**は、これまでの福岡から昭和20年7月5日熊本に移駐し、本部を熊本駅裏花岡山の旅館「蓬莱閣」を仮住まいとし、兵舎を花岡山北側丘陵に設置し、指揮をつかさどった。

当部隊主任参謀の河内山讓氏の「抗爆型の地下指揮施設を、国道337号の三宮神社に近いところから北に入った立田山山腹に、二百数十メートルに及ぶ洞穴を掘り」証言が残されている。また、地下司令部壕は、「汽車のトンネルほどの大きな穴が三つ開いていた」、「トンネルは人が立って十分入れる大きさの素掘りで、両脇に机が置かれ小型の無線機や電話機が取り付けられていた。裸電球の電線が天井を走っていた」、「地下壕の前には木造の三角兵舎が二つあり、穴から出ては日光に当たった。部隊長以下50~60人はいた」との、情報将校新忠信陸軍大尉の証言もある。

立田山は熊本市中心市街地から見て北東方向に位置する丘陵状の山で、金峰山の外輪山（熊ノ岳など）の生成と同時期に形成された山系である。裾部の龍田町6丁目には「**第三十戦闘集団部隊将校宿泊所**」に関する証言と壕内保持板（全長4.03m×横19cm：六寸×厚3.3cm・材質は杉材）2枚と旧陸軍円苺（スコップ・全長120cm）が残されている。

戦後の壕内部への入室地元証言では、「地下壕は入口が3箇所あり、東向きに開口し中央部壕は最も立派で、その間隔は15~20m程離れていた。壕の入口はほぼ円形に穿たれており、内部断面は真四角・方形（高さ2.5m×横幅3m程度）となり、支持木・坑木と保持板で固定されて、一部の場所は三方は板張りであった。3本の壕は御駐蹕記念碑（北西）方向に並行して延びており、横方向にも所々で繋がり、途中で上に延びる換気穴もあり、中央部壕では最深部までは随分と長かった」という。

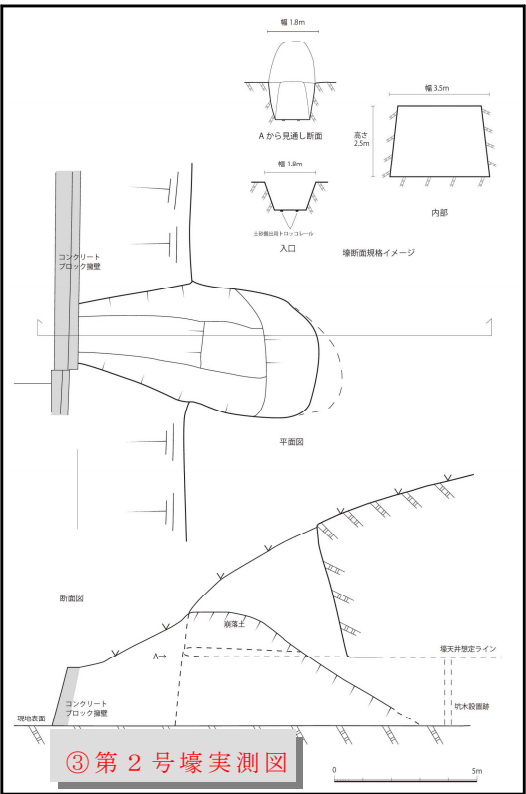


②第2号壕開口部の内部状況

3 司令部壕の調査概要

2号壕は、熊本市北区龍田陳内2丁目に、1号壕から北東等方向に20m程離れ東向きに開口している。

入口現況は大きく崩落しているが、②の様に横幅4.1m、壕底部までは推定で6m程下がることから、当時の壕床面GLは、両崖から一段落ち掘きったU形状況であったと想定される。証言では、排土先は「現市道をまたぎ東側の崖線まで延び」、「三角兵舎二棟」は、1・2号壕前で旧畑の平地と想定できる。令和4年4月2日、司令部壕の全景撮影、内部のビデオ撮影、周辺部の測量調査を実施した。想定される壕内部規格は③の通り横幅3.5m、全高2.5m程度であり、側面には坑木設置跡が確認できた。



4 戦後接收の熊本（健軍）飛行場

(1) 熊本県内接收映像・写真

熊本県内の接收状況等を撮影したもので、映像では「N CM長崎ケーブルメディア」資料を含め3本が、写真では「長崎平和推進協会」資料を含め3件が確認されている。撮影対象は、熊本・菊池飛行場、三菱熊本航空機製作所、菊池恵楓園、熊本駅、空襲後の市街地ほかである。

(2) 熊本飛行場の概要

熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ-67）」試験飛行のための飛行場として設営された。

昭和19年4月「飛龍第一号機進空式」時には飛行場諸施設も南・西側に完成し、同6月大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和20年4月、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能が更に拡充する。昭和20年5月の義号作戦では、沖縄に向け「義烈空挺隊」の発進が当飛行場から行われた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊（陸軍重爆隊、その後は百十重爆撃隊と統合し、百七十戦隊に編制替）、第一七独立飛行隊、第五五飛行中隊、第一七四飛行場大隊の配備部隊名が記されている。

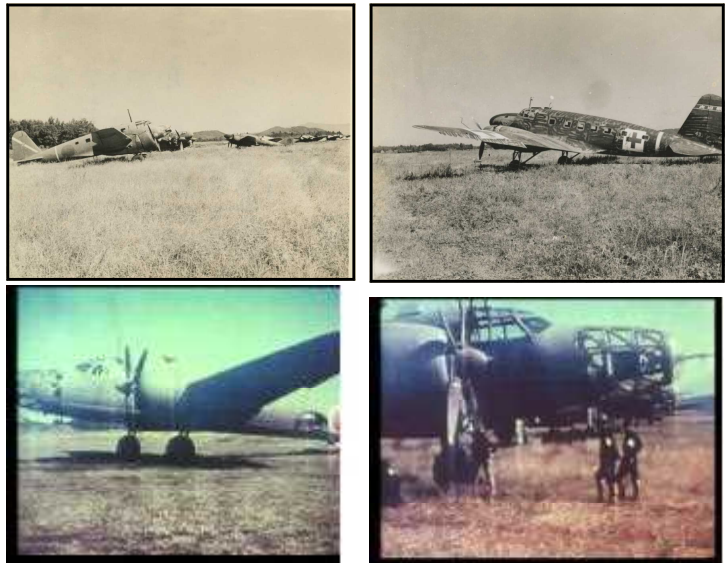
司令部壕は一級河川白川右岸、熊本飛行場は左岸で、両者は直線距離にして約3kmを保つ。

(3) 撮影概要と接收状況

健軍飛行場での施設接收状況、飛行機・武器類の接收・遺棄・破壊状況の撮影を目的とした写真・映像が残されている。撮影部隊は、米海兵隊第2海兵師団ノーマン・ハッチ少佐指揮下の撮影班(2D MAR DIV MOVIE SELECTION)で、同時に複数班が映像・スチール写真も撮影している。撮影は1945年9月23日～11月10日である。

接收時写真は、各種飛行機15枚、各種機材・用品等16枚、焼却様子7枚、計38枚である。撮影は1945年10月4日・15日・23日・26日・11月20日である。④は飛行場東側での日本軍飛行機の列機撮影である。左列手前より一〇〇式輸送機、一〇〇式司令部偵察機、中央にも一〇〇式司令部偵察機が並ぶ。⑤は尾翼に「大日航」「43」を、機首に社マークの描かれた大日本航空の民間機である。機体各所には白背景で「緑十字」が描かれている。英文では、マニラから飛来した平和特使機と説明される。機体は陸軍一〇〇式輸送機を民間に転用した「三菱MC-20」機である。

また、本飛行場の16ミルカラー映像は、37秒・39秒・20秒の計116秒撮影の一本が確認されている。第一七〇戦隊の陸軍四式重爆撃機「飛龍」列機が金峰山系を背景に並んだ様子をはじめ、⑥横シルエット飛龍機、⑦機首に機銃を装備した完全武装状況の映像等が確認できた。



④飛行場東側での日本軍飛行機列機 ⑤緑十字旗の百式輸送機
⑥百七十戦隊飛龍機 ⑦飛龍機首部の拡大 ※④⑤は台紙からの写真トリミング、⑥⑦はカラー映像からのカット写真